

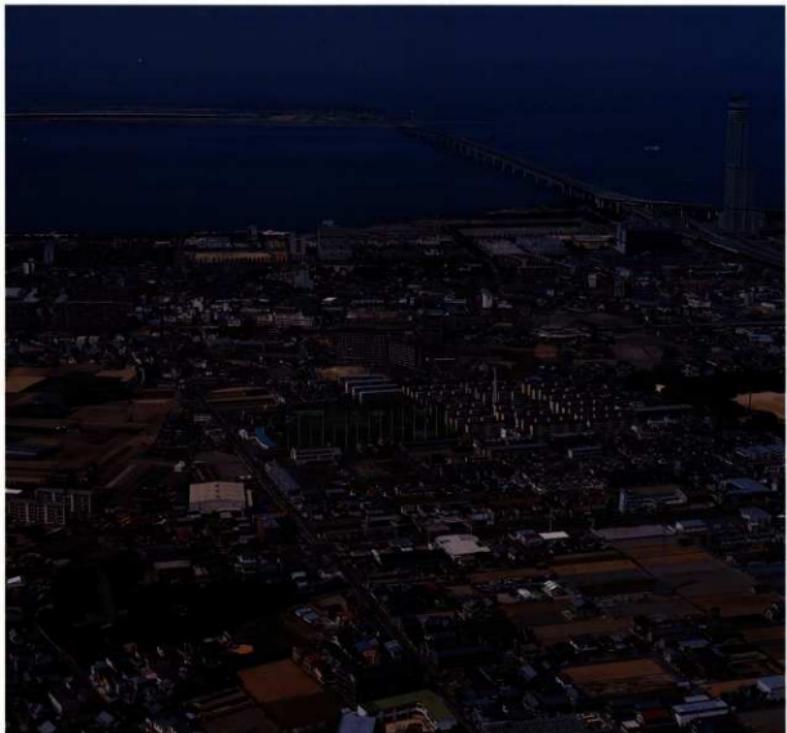
大阪府埋蔵文化財調査報告 2007-8

安松田遺跡Ⅱ

大阪府教育委員会

安 松 田 遺 跡 Ⅱ

大阪府教育委員会



調査区遠景



3区出土サヌカイト製翼状剥片石核(実大)

序 文

安松田遺跡は、泉佐野市東羽倉崎町にある旧石器時代から中世に至る複合遺跡です。現在までの発掘調査で、中世から近世にかけての粘土採掘土坑などが多数検出されています。

大阪府教育委員会では、府営泉佐野羽倉崎住宅建て替えに先立ち、平成18年度に発掘調査を実施しました。その結果、30数基の土坑・溝などの遺構が検出され、中世の瓦器や土師器、陶磁器などの遺物が出土しました。これらの遺構・遺物は、当地域の歴史を解明していく上で、かけがえのない貴重な資料になるものと思われます。

本調査の実施にあたっては、地元の方々をはじめ、大阪府住宅まちづくり部、泉佐野市教育委員会等々の関係各位に多大なご指導とご協力を賜りました。厚く感謝いたしますとともに、今後とも本府文化財保護行政により一層のご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成20年3月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長　富尾　昌秀

例　　言

1. 本書は、大阪府住宅まちづくり部から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した府営泉佐野羽倉崎住宅建て替えに伴う、泉佐野市東羽倉崎町所在、安松田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 現地調査は、大阪府教育委員会文化財保護課調査第二グループ主査藤澤真依が担当し、平成18年度に実施した。遺物整理は、平成19年度に調査管理グループ主査三宅正浩・同技師藤田道子が担当した。
3. 本調査の調査番号は、06016である。
4. 本書に掲載した遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
5. 本調査の写真測量は、日本テクノ株式会社に委託した。撮影フィルムは同社が保管している。
6. 調査で作製した記録資料と出土遺物は大阪府教育委員会で保管している。
7. 本書は藤澤と調査員久米廣陵が執筆、編集した。
8. 発掘調査・遺物整理ならびに本書の作成に要した経費は、大阪府住宅まちづくり部が負担した。
9. 本報告書は、300部作成し、一部あたりの印刷単価は、609円である。

本文目次

序文

例言

目次

第1章	調査に至る経過	1
第2章	位置と環境	2
第3章	調査の方法	6
第4章	調査結果	8
(1)	基本層序	8
(2)	1区の調査	11
(3)	2区の調査	11
(4)	3区の調査	12
第5章	まとめ	26

挿図目次

図1	泉佐野市安松田遺跡の位置	1
図2	周辺遺跡分布図	5
図3	調査地点位置図	6
図4	調査区地区割図	7
図5	3区出土翼状剥片石核実測図	8
図6	基本層序図	9
図7	1～3区遺構平面図	10
図8	1区溝1土層断面図	11
図9	2区畦畔2土層断面図	12
図10	3区井戸29土層断面図	13
図11	3区溝30土層断面図	14
図12	3区土坑28土層断面図	14
図13	3区土坑土層断面図	17
図14	3区土坑掘削順序図	27

図版目次

- 卷頭カラー図版 (上) 調査区遠景
(下) 3区出土サヌカイト製翼状剥片石核（実大）
- 図版1 (上) 調査地遠景
(下) 調査地全景
- 図版2 (上) 1区全景
(下) 1区溝1検出状況
- 図版3 (上) 1区溝1土層断面
(下) 1区溝1完掘状況
- 図版4 (上) 2区全景
(下) 2区畔2検出状況
- 図版5 (上) 2区土坑3検出状況
(下) 3区全景
- 図版6 (上) 3区西半全景
(下) 3区東半全景
- 図版7 (上) 3区土坑5、6
(下) 3区土坑7、8、9
- 図版8 (上) 3区土坑33、35
(下) 3区土坑11、18自然堆積状況
- 図版9 (上) 3区土坑14自然堆積状況
(下) 3区土坑34、31
- 図版10 (上) 3区井戸29土層断面
(下) 3区井戸29完掘状況
- 図版11 (上) 3区溝30検出状況
(下) 3区溝30完掘状況
- 図版12 3区西半 黄褐粘土出土サヌカイト製翼状剥片石核（実大）
- 図版13 (上) 3区 土坑4(1・2)、土坑13(3)、包含層(4~6)出土土器
(下) 3区 包含層(1~8)出土土器・土錘

第1章 調査に至る経過

本発掘調査は、大阪府教育委員会が大阪府住宅まちづくり部からの依頼を受け、平成18年度に泉佐野市東羽倉崎町で実施したものである。

調査原因の府営住宅（建て替え）建設工事とは、老朽化した木造・簡易耐火住宅を「大阪府営住宅ストック総合活用計画」（平成14年2月策定）に基づき、順次建て替えていくものである。

工事の実施に先立って、事業主体である住宅経営室と文化財保護課は、協議を行い、埋蔵文化財の有無確認のため、工事区域の試掘調査を実施することとした。平成13年度に行なわれた試掘調査では、6箇所のトレーナーから平安時代～中世の遺構・遺物が検出され、遺跡の存在が判明した。その結果をもとに、遺跡発見の法手続きが執られると共に、再度、協議がもたれ、住宅建て替え工事に先立って、工事区域の本発掘調査を必要とする措置が決まった。

平成15年度には、工事によって地下の遺構が損壊される住棟部などの基礎部分を発掘調査した（大阪府教育委員会『安松田遺跡』「大阪府埋蔵文化財調査報告2004-3」、2005年3月）。

平成18年度には、平成15年度に引き続き、住棟部、集会所、機械室の基礎部分を発掘調査した。その調査結果を報告するのが、本報告書である。

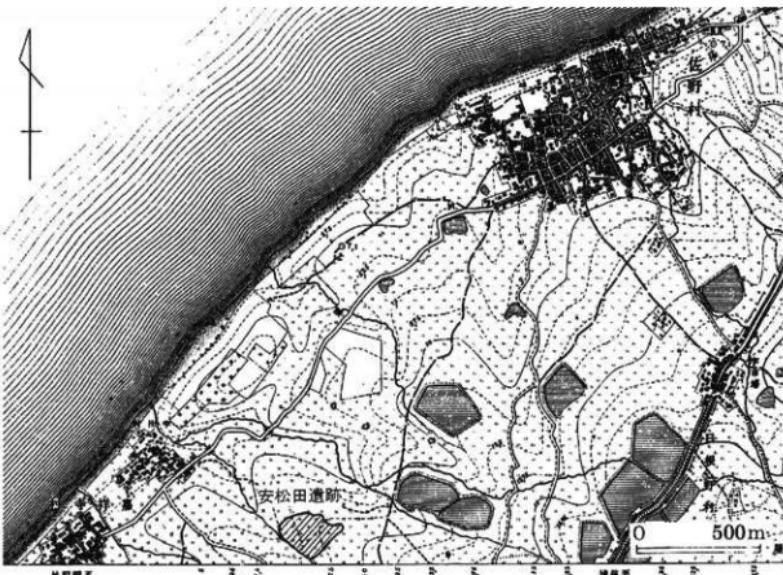


図1 泉佐野市安松田遺跡の位置（明治18年陸測図による）

第2章 位置と環境

安松田遺跡の所在する泉佐野市は大阪府南部に位置する。北は大阪湾に面し、東は熊取町、貝塚市、西は田尻町、泉南市、南は和泉層群より形成される和泉山脈を介して和歌山県と接している。泉佐野市の地理的立地を概観すると、北から海岸平野部、丘陵部、山間部に分けることができる。市域を流れる河川は、北から貝塚市と境をなす出見川、中心部の佐野川、泉南市・田尻町と境をなす櫻井川の三河川があり、いずれも大阪湾に注ぎ込んでいる。市の中央部には中位から高位段丘、西部と南部には低位段丘および沖積低地からなる和泉平野が広がる。安松田遺跡はその西側の平野部、海岸線から約1.2km内陸に入った安松川と根来川により開析された下位段丘面上に位置する。標高は7~8mである。

歴史的環境をみると、旧石器時代の遺跡は、明確な資料に乏しく、櫻井川沿いの沖積段丘上から洪積段丘上にまたがる三軒屋遺跡、周辺の長瀧遺跡、郷ノ芝遺跡、泉南市の滑瀬遺跡などでナイフ形石器が出土している。

縄文時代では、櫻井川下流域の船岡山遺跡（当遺跡南西部）で後期の集落が、中流域の三軒屋遺跡で後期から晩期の遺物が出土している。そして、櫻井川対岸のフキアゲ山東遺跡や佐野川沿いの上町東遺跡のように洪積段丘面と沖積段丘面との変換点付近に遺跡の出現を見ることが出来る。また、海岸に近い湊遺跡などからも晩期の土器や石器が出土しており、段丘部のみではなく、平野部にも遺跡の分布が広がっている。

弥生時代に入ると、さらに遺跡の分布は広がるが、沖積低地の発達が少ないと地理的条件に制約されているため、進展はあまり見られない。やはり、佐野川、櫻井川に沿って集落が数多く営まれる。低位段丘面によって構成される平野が展開する地形のため、河川からの灌漑用水が利用しやすく、そのために早くから農業経営が可能であったという点に求めることが出来る。三軒屋遺跡、船岡山遺跡では土器のほか、石庖丁や広鋸などの農耕具が出土している。海岸部に近い湊遺跡や松原遺跡などでは多くの製塙土器が出土しており、弥生時代後期から製塙が行われていたことがわかる。櫻井西遺跡や諸目遺跡、三軒屋遺跡では方形周溝墓が検出されている。

古墳時代に入ると、当該地周辺における古墳の分布は非常に乏しく、特に泉佐野市内では、前期の古墳は知られていない。櫻井川左岸丘陵部のフキアゲ山古墳群、兎田古墳群、新家古墳群、同右岸平野部の長瀧古墳群、上之郷地区の石の子古墳などが知られる。フキアゲ山1号墳では紀伊系の有蓋高杯、新家3号墳から初期須恵器が出土している。長瀧1号墳では須恵器の大壺、高杯系器台、人物埴輪（女性）が出土した。石の子古墳は終末期の古墳で、須恵器の長頸壺、高杯、壺蓋、鉄釘などが出土した。三軒屋遺跡、諸目遺跡では多量の円筒埴輪が出土していることから、後世の開発で破壊された古墳が数多く存在し、周辺では、比較的広い範囲に古墳群が形成されていたと推察される。集落の立地は、ほぼ弥生時代と同じくし、櫻井川沿いで多く見られる。三軒屋遺跡、船岡山遺跡、諸目遺跡などがそうである。特に、三軒屋遺跡では、韓式系土器や初期須

恵器が出土しており、渡来系集団の居住していた可能性も指摘されている。やや離れて、羽倉崎遺跡（当遺跡西部）、湊遺跡、松原遺跡では製塙土器が出土している。

古代では、白鳳時代建立として知られる禪興寺跡がある。寺域ははっきりしないが、指定域の調査で、山田寺式、川原寺式、紀寺式などの軒丸瓦が出土している。飛鳥時代では、三軒屋遺跡や湊遺跡などで集落が検出されている。また、長瀧遺跡では、覆い屋付の井戸が検出され、斎串や独楽などが出土したため、何らかの祭祀が行われたことが考えられている。奈良時代では、湊遺跡から多くの掘立柱建物跡が検出されており、漁労具の蛸壺や土錘のほか、「和同開珎」なども出土している。また、長瀧遺跡では瓦窯跡が検出されているが、供給先は明らかになっていない。平安時代では、日根野遺跡のほか、湊遺跡、上之郷遺跡、三軒屋遺跡、船岡山遺跡などで掘立柱建物跡などが多数検出されている。上之郷遺跡では綠釉陶器やふいごの羽口などが出土しており、有力農民の屋敷地と考えられている。

中世では、ほぼ市内全域に遺跡が広がることを確認されている。湊遺跡のほか、日根野遺跡、上町遺跡、櫻井西遺跡、机场遺跡などで大規模な集落跡が検出されている。また、文献で知られている檀波羅密寺跡は、土坑墓群などが検出されている。

近世では、中世からの集落が存続して、現在の泉佐野市街地を形成するようになる。湊遺跡、若宮遺跡などがあげられ、屋敷地や掘立柱建物群や土坑、井戸などが検出されている。遺物は、近世陶磁器や土師器、土錘などが出土している。安松田遺跡北東部に位置する末広遺跡では井戸、土坑、溝、鋤溝などが検出されている。遺物は瓦器や近世陶磁器が出土しているが、縄文時代の石匙や弥生時代の壺・石錐が伴い、縄文時代からの人間の痕跡も確認できている。

古来和泉国の地域は、茅渟と称した。『日本書紀』によると、天皇は、垂仁天皇35年に五十瓊敷命に命じて茅渟池を作らせたと記されている。このことは、この時期に既にある程度大和朝廷の直接支配が及び、開発が進んでいたことを示す。地域周辺は瀬戸内式気候のため、降水量が少ない。さらに、地形的要因として、大きな川がなく、平野は主として洪積層の台地なので河川の水が引きにくい。また土壤が透水性に富むことから、古くから水不足に悩まされる地域であった。允恭天皇8年、天皇は衣通郎姫のために河内茅渟宮を建て、たびたび行幸し、日根野に遊獵したと記されている。茅渟宮は上之郷中村に比定する説が江戸時代以来あるが、確かな根拠はない。近年では、茅渟宮 = 和泉宮と考え、和泉郡（和泉市府中付近）に比定する説があり、上之郷中村の「茅渟宮址」は揺らいでいる。茅渟難宮は奈良時代にも設けられ、靈亀2(716)年、その経営のために和泉・日根2都を割き、天平16(744)年には元正太上天皇が2回行幸している。『日本紀略』によると、延暦22(803)年に桓武天皇の和泉国日根野行幸があり、『日本後紀』では、延暦23(804)年に、垣田野・蘭生野・日根野に獵した後、紀伊の玉出嶋に行幸し、その後また行宮に帰り熊取野に遊獵している。平安初期においても、日根野や熊取は未だ広大な原野が存在する狩猟の地であったといえる。

この地域における古代条里制については、文献史料がなく、いつの時期から施行されたものか

は不明である。条里制とは班田収受を行うためになされた。すなわち、一定の基準に従って耕地を班給するにはそれに便利なように区画がなされねばならず、ある程度自然の条件を無視してなされるものであった。改新以来ほとんど全国の平野や盆地に画一的な土地区画が施行された。河内では平野中央部はもちろん、石川の谷間平野でも東西南北に直行する最も原則的な条里制を採用している。しかし和泉では、そのような一貫した形はとっておらず、地勢に即し、多分に現地主義的なものであった。和泉の条里の中でも、和泉市府中を中心に、泉大津市から岸和田市にかけての和泉平野の最も広い部分、泉佐野市上之郷を含む櫛井川右岸の条里は基本的な条里が施行されているが、それ以外は個々の平野部ごとに独自の走向を持ち、ときには屈曲した走向をとるものであった。和泉と河内にこのような差異が認められるのは互いに異なる条件で条里の施行がなされたことを物語っている。条里制の施行というのは、当時としては非常に大事業で簡単なものではなかった。これには、自然条件とともに一定の歴史的条件を備えている必要があり、当時の和泉地域にはその条件を満たすだけの準備は未だできていなかったといえる。

平安遷都以降、南海道（紀州街道）が海岸線にほぼ平行しており、これが後世の熊野街道（小栗街道）に転じる。このため、日根郡は熊野や高野山への参詣が盛んになると、交通の要地となつた。永承3（1048）年に高野山へ参拝した藤原頼道は「日根」に往復とも宿泊している。また、久安3（1147）年から3年間頻繁に高野山に登山した仁和寺の覚法親王は、日根湊で乗下船するものが通例であったという。

古代～中世の荘園に関しては、日根荘をはじめとして、鶴原荘、佐野荘、珍北荘・珍南荘などが知られる。この中でも特に中世の日根荘に関する文献史料はかなり豊富で、主なものとしては荘園領主であった九条家の「日根荘関係文書」、九条政基が当地に滞在した際の詳細な日記『政基公旅引付』、日根野村絵図などが挙げられる。

13世紀になると、ようやく日根野の荒野の開発が企てられるようになってくる。当地は、もと東北院領長瀧庄の東部から北東部にかけての荒野であった。元久2（1205）年に高野山の鎌阿上人が、貞応元（1222）年にも高野山の寺僧が開発を企てたが、いずれも失敗に終る。しかし、天福2（1234）年6月に、閑白九条家の申請で宣旨が下され、九条家領日根荘が成立した。その後は必ずしも順調に発展しなかったようで、14世紀になると九条家が自らその經營に乗り出していく。延慶3（1310）年、実専なる僧に7年間開発を請け負わせたが失敗に終わる。正和5（1316）年、今度は九条家の支配下にある久米田寺に、開発の対象を日根野村に限定して請け負わせるが、どの程度進められたかは史料的に確認できていない。

中世末になると、熊野街道沿いの集落に代わって、孝子街道沿いの佐野町場が、漁業や流通拠点として興隆し始める。そして、当地は、紀伊国根来寺の勢力圏に入る。織豊政権期には、石山本願寺と結びついた紀伊雜賀衆・根来寺が、織田・豊臣政権と対立する。このため泉佐野市域を含めた泉州南部から和歌山にかけての地域が戦場となり、多くの村が焼き払われる被害を受けた。根来寺の勢力圏にあった長瀧の禪興寺、蟻通神社も戦火で消失してしまう。秀吉は紀州を攻略し

たのち、文禄3（1594）年、泉州で太閤検地を実施し、近世の支配の基礎を築いた。また、朝鮮出兵の際に、佐野漁民を水先案内あるいは輸送に奮闘させ、彼らのめざましい活躍と功績により対馬浦々の漁業権を恩賞として与えた。これが佐野網方の起源であるといわれている。

近世になると岸和田藩主として松井氏が入り、現泉佐野市域の村々はほとんどが岸和田藩領となつた。近世にいたっても、日根野地域にはかなりの荒野が存在し、俵屋新田をはじめとする新田開発が盛んに行われた。このほか、食野・唐金・矢倉などの廻船業を担つた豪商たちも、寛文年間を中心に佐野村・市場村・日根野村などの新田開発を行つてゐる。

元禄期に佐野は町場として最盛期を迎える。

安松田遺跡は平成13年に実施された府営羽倉崎住宅の建て替えに先立つ試掘調査による新規発見遺跡である。周辺に立地する遺跡は上記のとおりであり、隣接はしていないものの、周辺において縄文から近世の遺跡が分布する今回の調査対象地は、それらとの関連性をもつ可能性があった。既往の調査では、中世から近代の粘土採掘坑、畦畔、井戸、耕作溝などが検出されている。以上の点をふまえながら今回の調査に入った。



図2 周辺遺跡分布図（2 羽倉崎遺跡、31 羽倉崎東遺跡、42 末広遺跡、87 羽倉崎上町遺跡）

第3章 調査の方法

調査区は全体で3区であった。最初に調査区東、南側の1、2区について調査を行い、続いて北側の3区の調査に着手した。3区は東西に2分割し、まず西半部から、続いて東半部の調査を実施した。

調査は、まず現地表面から約0.4～0.8m（表土、盛土、耕土）を機械掘削した。以下の層は人力で掘削し、遺構・遺物の検出に務めると共に、遺構平面図及び断面層序図の作成を行った。実測図は1/20を基本とし、遺構平面図は航空撮影により1/20図化を行った。

調査区の地区割り（図4）は、大阪府教育委員会、（財）大阪府文化財センターの発掘調査において、調査区の位置が共通して表現できるよう、大阪府発行1万分の1の地形図を基準として4段階の区分を実施している。第I区画は南西隅を基準として、縦軸をA～O、横軸を0～8に区画したもので、縦6km、横8kmの範囲となる。第II区画は第I区画の南西隅を基準として16等分したもので、縦1.5km、横2.0kmの範囲となる。第III区画は第II区画を100m方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸を1～20、横軸をA～Oに区分したものである。今回の調査区は3A、4A、4Bにあたる。第IV区画は第III区画を10m方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸a～j、横軸を1～10に区分したものである。たとえば、今回の調査地点のひとつはC-2-8-4A-Iなどと表記される。

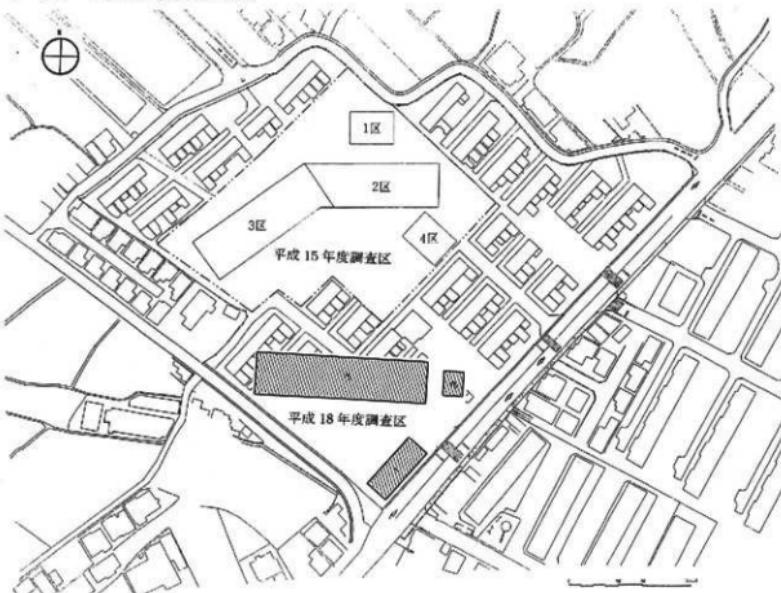


図3 調査地点位置図

尚、遺物の取り上げに際し、1区に関しては出土遺物がなかったため、地区割りの設定はせず、2区に関しても調査面積の規模から地区割りの設定を必要としなかった。3区に関しては、便宜上調査区の検測用杭を利用して地区割りを設定した。東西70m、南北17mの調査範囲であったが、まず東西軸を14分割、南北軸を2分割して、1区区画8.5m×5mの範囲に区画した。南北軸の8.5m地点を基点に、南側の区画は西から東へa1、a2、c1、c2、e1・・・とし、北側の区画は西からb1、b2、d1、d2、f1・・・とした。3区は28区画(図4)となる。

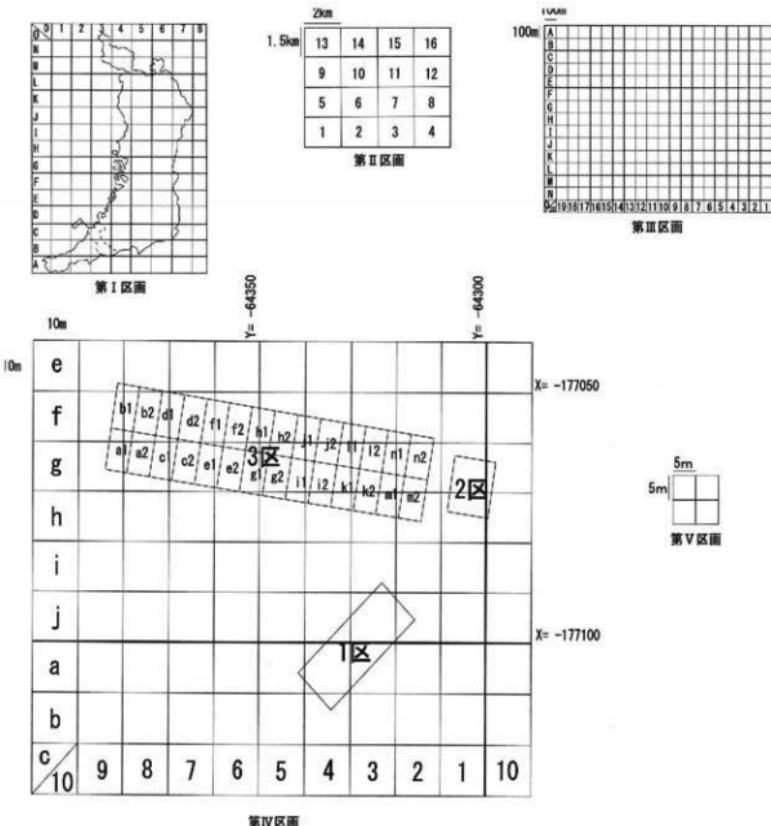


図4 調査区地区割図

第4章 調査結果

(1) 基本層序

調査地は、府営羽倉崎住宅地内の南東部から中央部に位置する。調査区内では2区が最も標高が高くT.P.+8.3m前後を測る。この付近は東（山側）から西（海側）にかけて緩やかに低くなる地形である。現地表面の高さは1区でT.P.+8.2m、3区東端でT.P.+8.2m、西端でT.P.+7.8mを測る。

現地表面から、まず表土及び府営住宅建設時の造成盛土を0.2~0.8m除去した。これ以下の基本的な堆積土は5層である。第1層は灰色土で府営住宅建設前の水田耕土である。調査区全面に堆積し、層厚は0.05~0.2mを測る。2区では北西方向を軸に東に田が1段低くなる（図6-C）。3区では中央部で田が西に1段低くなり（図6-B）、北西方向を軸に北にさらに1段低くなる（図6-A）。第2層は明黄褐色砂質シルト及びにぶい黄褐色シルトで、水田の床土層である。層厚は0.05~0.2mを測る。古墳時代~近世の遺物が含まれる。2、3区に堆積するが、図6-Aには堆積しない。No.3~No.4に

かけて第2層の堆積は厚くなるが、これは3区中央部で田が西に一段低くなるところからはじまり、西に向かって層は厚くなる。したがって、3区西部の第2層は床土層であるとともに、緩やかな斜面地での水田造成盛り土とも考えられる。第3層は黒褐色粘土である。無遺物層で層厚は0.02~0.1mを測る。2、3区に堆積するが、3区西半部の図6-Aには堆積しない。後世の耕地化による削平であると考えられる。第4層は黄褐色粘土で、調査区全域に堆積する。No.3~No.4にかけて高さが著しく変わるのは後世の耕地化による削平であると考えられる。3区中央部の田が西に一段低くなるところで大きく変化した。3区西南部で第4層上部より旧石器（巻頭カラー

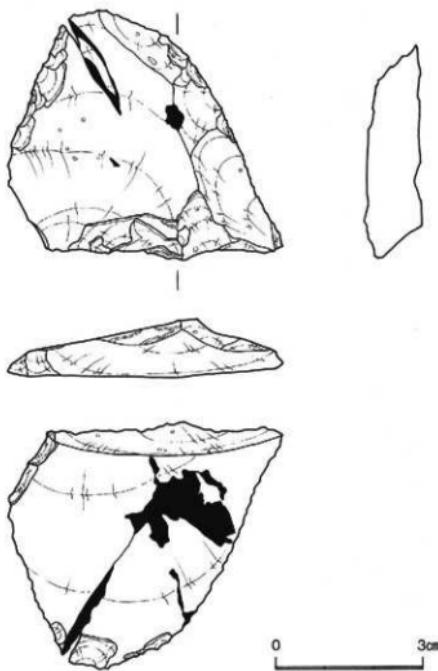


図5 3区出土翼状剥片石核実測図

図版、図5、図版12)が出土したため、調査終盤に3区西南部の一部を確認調査した。確認調査で遺物は出土しなかったが、第4層の1.2m下から第5層の灰色砂疊層を確認した。第5層は3区西部から中央部にかけて確認できたが、調査区内に広い範囲で広がると思われる。安松川の旧石器時代以前の旧河道あるいは氾濫源と考えられる。

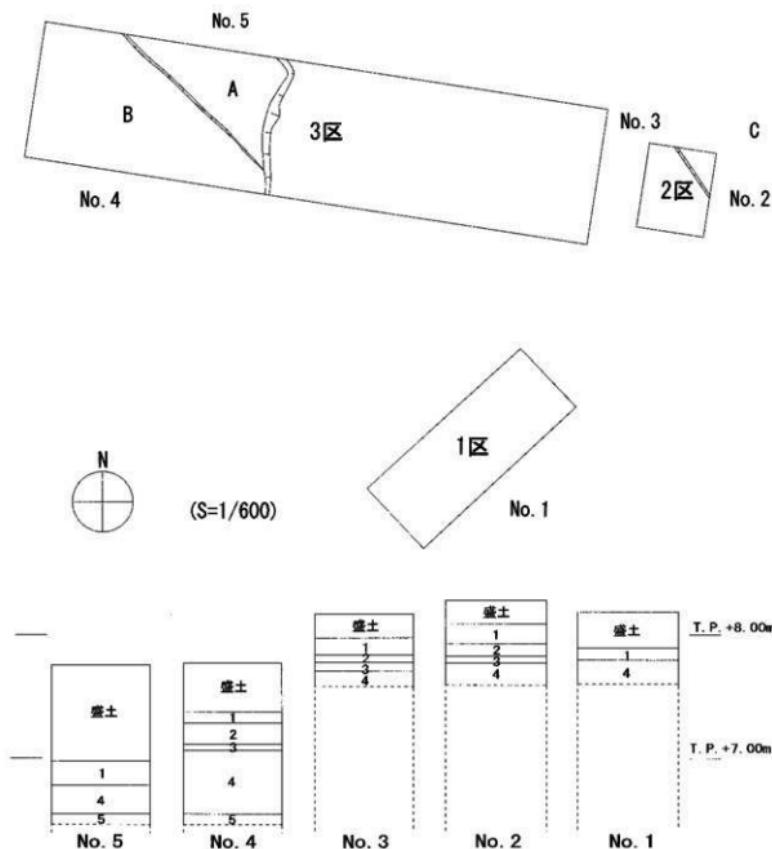


図6 基本層序図

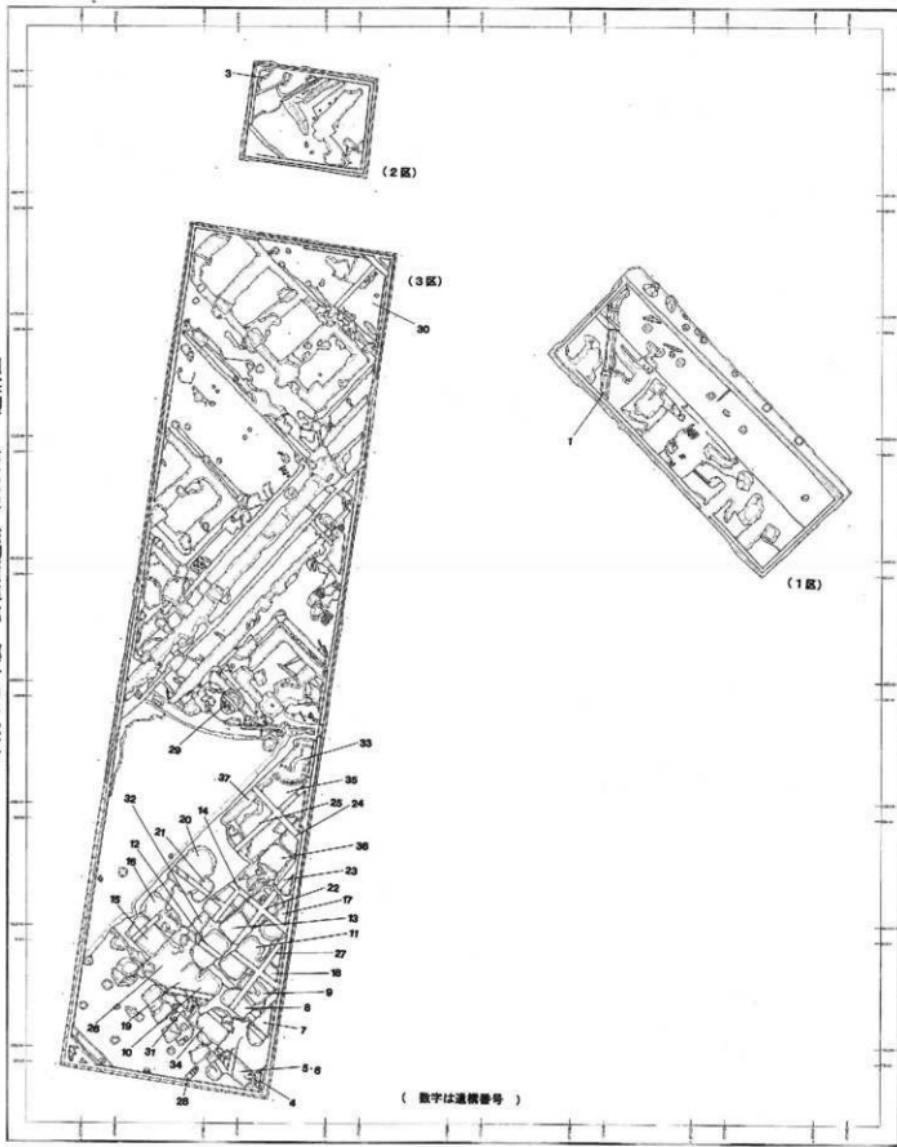


図7 1～3区遺構平面図

(2) 1区の調査

1区は調査地の南東部に位置し、東西10m×南北25mの長方形を呈す。長軸はN43°Eを指し、調査地東側を通る市道に平行している。

遺構面は1面あり、遺構検出は第4層黄褐色粘土層上面で行った。1区では溝を検出した。

溝1(図8、図版2、3)

1区北西部に位置し、北壁から西壁に向かってほぼ直線的に走る溝である。主軸は東西方向に向く。検出長9.7m、上幅0.7~1m、深度は0.4mを測る。断面形状は不整形な逆台形状を呈し、下幅は0.2~0.3mを測る。検出高は北壁側の上端でT.P.+7.56~7.59m、下端でT.P.+7.14m、西壁側の上端でT.P.+7.57m、下端でT.P.+7.2mを測る。

埋土は全体で4層である。第1層は黒褐色粘土(2.5Y3/1:全体的にやや酸化、硬質、粘性なし、部分的に7.5Y7/2灰黄色の粘土ブロックが混入)である。中央部に堆積する。断面では椀状を呈し、層厚は最深部で0.15mを測る。第2層は黄灰色シルト(2.5Y6/1:全体的にやや酸化、粘性やや有、7.5YR6/8橙色粘土ブロックが混入)である。全面に堆積し、層厚は北部、南部で0.25m、中央部で0.03mである。第3層は黄灰色粘土(2.5Y5/1:全体的に酸化、粘性やや有、全体的に0.1~0.2cm程の小礫含む)である。全面に堆積し、層厚は北部で0.05m、中央部で0.1~0.05m、南部で0.05mである。第4層は灰黄色シルト(2.5Y6/2:全体的にやや酸化、粘性やや有、全体的に0.5~1cm程の小礫多く含む、全体に7.5YR6/8橙色粘土ブロックが混入、しまり悪い)である。全面に堆積し、層厚は北部で0.1m、南部で0.15mである。

第4、3、2、1層は自然堆積であると考えられる。溝として機能する中でゆっくり土が堆積し、徐々に狭く浅い流れの溝になったと考えられる。第4~1層は基本層序で見られる黒褐色粘土と同じ土である。遺物は出土しなかった。

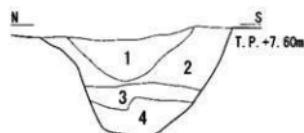


図8 溝1土層断面図(S=1/20)

(3) 2区の調査

2区は調査地の東部に位置し、東西8m×南北10mの長方形を呈す。長軸はN9°Eを指す。1区東北辺から東北に約23m離れている。

遺構面は2面あり、遺構検出は第3層黒褐色粘土層上面、第4層黄褐色粘土層上面で行った。第3層上面では畦畔、第4層上面では土坑を検出した。

畦畔2(図9、図版4)

2区南半部に位置し、調査区西、東壁に面している。平面形状は逆L字形を呈す畦畔である。検出長5.5m、上幅0.3m、下幅0.75mを測る。調査区南東部から北方向へ3.5mのび、そこから

直角に屈曲し2mほどで搅乱のため途切れる。しかし、西壁断面で確認することはできた。断面形状は蒲鉾形を呈し、高さは0.2~0.3mを測る。検出高は西壁断面で頂部T.P.+8.06m、北側裾部でT.P.+7.92m、南側裾部でT.P.+7.84m、屈曲部で頂部T.P.+7.93m、北側裾部でT.P.+7.76m、南側裾部でT.P.+7.79m、東壁断面で頂部T.P.+8.11m、北側裾部でT.P.+7.95m、南側裾部でT.P.+7.79mである。

盛土は1層でぶい黄褐色シルト(10YR5/4:部分的に強く酸化、

全体に0.1~5cm程の小砾混入、しまり良、粘性なし)で

ある。遺物は出土しなかった。



図9 2区畦畔2土層断面図

(S=1/40)

土坑03(図版5)

2区北、東壁のコーナー部に位置するため、全形は明らかでないが隅丸長方形の一部を検出したような土坑である。検出長は2.6m、幅は2.05m、深度は0.1mを測る。検出高は北壁断面で西側の上端がT.P.+7.42m、下端がT.P.+7.33m、東壁断面で南側の上端がT.P.+7.4m、下端がT.P.+7.3mである。断面形状は上端から下端にかけて緩やかに低くなり、底はほぼ平坦である。最深部は南側の下端でT.P.+7.29mである。

埋土は1層で黒褐色粘土(10YR3/1:全体的に10YR5/6の黄褐色地山粘土ブロックが混入、硬質、部分的に酸化、粘性なし、しまり良)である。第1層は自然堆積であると考えられる。遺物は出土しなかった。

(4) 3区の調査

3区は調査地の北西部に位置し、東西70m×南北17mである。短軸はN9°Eを指し、2区の長輪と平行し、2区の西辺から5.5m西に離れている。

遺構面は2面あり、遺構検出は第3層黒褐色粘土層上面、第4層黄褐色粘土層上面で行った。第3層上面で土坑、第4層上面で溝、井戸などを検出した。

井戸29(図10、図版10)

3区中央部に位置する。平面形状は僅かに橢円形を呈し、長径2.05m 短径1.80mの第4層上面を切り込む井戸である。検出底径は0.85m、確認深度は約1.4mを測る。検出高は南側の上端でT.P.+7.4m、北側の上端でT.P.+7.37mである。断面形状は楕状を呈し、T.P.+6.05m迄掘削したが、最深部までは確認できなかった。湧水が激しくなったため、ほぼ最深部まで掘削したと思われるが、枠はなかったので素掘りの井戸と考えられる。第4層は検出面より-0.8m迄粘土で、以下は砂礫層である。

埋土は全体で13層である。第1層は灰黄色砂質土(2.5Y6/2:全体的に酸化、部分的に強く酸化、全体的に0.1~0.3cm程の礫が混入、粘性なし、しまり良)である。全面に堆積し、層厚は南部で0.3m、北部で0.45mを測る。第2層は灰黄色砂礫層(2.5Y6/2:1~8cm程の礫主体、全

体的に強く酸化)である。中央部よりやや南側に直径約1mの範囲で広がる層である。層厚は南部で0.15m、中央部で0.25m、北部で0.15mを測り、南側から北側にかけて下がる堆積である。第3層は灰色シルト(7.5Y5/1:全体的にやや酸化。全体的に0.1~0.2cm程の小礫が少量混入、粘性やや有、しまり良)である。中央部に直径約1mの範囲で広がる層である。ほぼ水平に堆積しており、層厚は南部で0.15m、中央部で0.05m、北部で0.15mを測る。第4層は灰色シルト(7.5Y5/1:全体的にやや酸化、全体的に0.1~0.2cm程の小礫が少量混入、部分的に炭化物混入、10YR5/6黄褐色粘土ブロック・10YR4/3にぶい黄褐色粘土ブロックが部分的に少量混入、粘性やや有、しまり良)である。中央部に直径約0.7mの範囲で広がる層である。断面では不整形な逆三角形状を呈し、最深部の層厚は0.3mを測る。第5層は黄褐色粘土+にぶい黄褐色粘土+緑灰色粘土+灰色シルト(10YR5/6+10YR4/3+10G6/1+5Y5/1:割合として黄褐色粘土30%、にぶい黄褐色粘土15%、緑灰色粘土15%、灰色シルト40%、灰色シルト内に小礫少量混入)である。掘り方に接し、0.5~0.7mの幅でドーナツ状に堆積する。掘り方から中央部へかけて0.2~0.25m下がる堆積で、層厚は0.3~0.4mを測る。第6層は暗灰黄色粘土(25Y5/2:全体的に小礫少量混入)である。中央部に直径約0.4mの範囲で広がる層である。北側から中央部へかけて0.15m下がり、中央部から南側にかけてはほぼ水平に堆積する。層厚は0.1mを測る。第7層は灰色シルト(5Y5/1:全体的にやや酸化、0.1~0.2cm程の小礫が全体に少量混入、部分的に炭化物混入)である。0.3~0.4mの幅でドーナツ状に堆積する層である。掘り方付近から中央部へかけて0.15~0.3m下がる堆積で、層厚は0.1mを測る。第8層は灰色シルト(7.5Y4/1:10YR5/6の黄褐色粘土ブロック土混入、粘性有)である。中央部に直径約0.3mの範囲で広がる層である。断面では浅い椀状を呈し、最深部の層厚は0.1mを測る。第9層は緑灰色粘土(10G6/1:部分的に強く酸化)である。壁際に0.2~0.3mの幅でドーナツ状に堆積し、0.2~0.25m下がる堆積である。層厚は0.1~0.15mを測る。第10層は緑灰色粘土(10G6/1:全体的に酸化、10YR5/6の黄褐色粘土ブロック土及び5Y5/1灰色シルト、10YR4/3にぶい黄褐色粘土ブロック土混入、粘性有)である。中央部に直径約1.4mの範囲で広がり、肩から中央部へかけて0.35m下がる堆積である。層厚は南部で0.2m、中央部、北部で0.15mを測る。第11層は灰色シルト(5Y4/1:粘性やや有、しまり悪い)である。北半部に堆積する。北側の掘り方から中央部にかけて0.25mほど下がる堆積である。層厚は0.1mを測る。第12層はオリーブ褐色シルト(5Y3/2:粘性やや有。しまり悪い)である。底部のはば全面に直径0.7mの範囲で堆積する。層の途中で掘削をやめたが、北側から南側にかけて0.2m下がる堆積である。層厚は0.1mを測る。第13層は青灰色粘土(5BG6/1:粘性有、しまり悪い)である。掘削は層の途中でやめたが、ほぼ全面に堆積する。層厚は南部で0.15m、中央部で0.05m、北部で0.2mを測る。

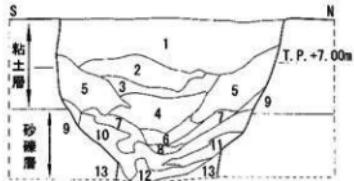


図10 3区井戸29土層断面図(S=1/40)

第12、11、8、7、6層は、井戸使用期間に堆積した層で、底さらいの際とりきれずに残ったものと考えられる。第5層は地山上に灰色シルトが混ざることから、人為的な堆積であると考えられる。第4.3層が堆積した段階では底さらいをした痕跡がなく、井戸は機能していないと考えられる。第2.1層は、井戸を埋める時の土で人為的な堆積と考えられる。遺物は出土しなかった。

溝30(図11、図版11)

3区最東部に位置し、平面形状は東～南壁に向かってほぼ直線状を呈す溝である。主軸は北東～南西方向に向く。検出長10m、幅5.1m、深度0.1mを測る。検出高は西側の上端でT.P.+7.72m、東側の上端でT.P.+7.7mである。断面形状は西側の上端から下端にかけてやや傾斜をもち、底部の西側から底部の中央にかけてはほぼ平坦である。底部の中央から一段下がり、断面形状は逆台形状を呈す。最深部は底部の中央でT.P.+7.54mである。



図11 3区溝30土層断面図 (S=1/40)

第1層は全調査区で見られる土であることから、自然堆積であると考えられる。遺物は出土しなかった。

土坑28(図12)

3区西端に位置し、主軸は北西方向を向く土坑である。調査区西壁に面しているため全形は明らかでないが、平面形状は長楕円形を呈し、検出長1.4m、幅0.45mを測る。検出高は南側の上端でT.P.+7.06m、北側の上端でT.P.+7.09mである。最深部は底部の南側でT.P.+6.83mである。断面形状は逆台形状を呈すが、底部の南側から北側にかけて緩やかに上がる。深度は南部で0.25m、北部で0.2mを測る。

埋土は1層で、にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4: 全体的にやや酸化、0.1～0.5cmほどの小礫少量混入、粘性やや有、しまり良) である。
遺物は須恵器が1片出土した。



図12 3区土坑28土層断面図

(S=1/40)

土坑4(図13)

3区西壁と南壁のほぼコーナー部分に位置し、土坑5・6を切っている。調査区南壁に面しているため全形は明らかでない。平面形状はほぼ半円形を呈すが、他遺構から楕円形、あるいは、隅丸長方形と考えられる。平面形状から主軸は北西方向に向くと考えられ、検出長は0.6m、幅は0.95mである。深度は東部で0.4m、中央部で0.3m、西部で0.3mを測る。検出高は西側の上

端で T.P.+7.05m、東側の上端で T.P.+7.09m である。断面形状は逆台形状を呈し、西側の下端で T.P.+6.74m、底部の中央で T.P.+6.72m、東側の下端で T.P.+6.74m である。

埋土は全体で 3 層である。第 1 層は暗灰黄色砂質土（2.5Y5/2：全体的に酸化、0.1～0.2cm 程の小礫が全体に混入、部分的に炭化物、5Y4/1 灰色土がブロックで混入、粘性なし、しまり悪い）である。全面に堆積し、西部から中央部にかけて層厚は 0.15～0.2m、中央部から東部にかけて層厚 0.2m を測る。第 2 層は灰色粘土と白色微砂の互層である。西部にのみ堆積し、層厚は 0.02m を測る。第 3 層は灰色土（5Y4/1：全体的に酸化、0.1～2cm 程の小礫が全体に混入、黄・黒褐・灰白色の粘土ブロックが層全体に少量混入）である。全面に堆積し、西部では層厚 0.15m、中央部で 0.1m、東部で 0.2m を測る。

第 3 層は粘土ブロックが含まれることから人為的に埋められたと考えられる。第 2 層は雨水などによる自然堆積と考えられる。第 1 層は灰色土ブロックが含まれることから人為的に埋められたと考えられる。第 2 層が自然堆積と考えられることから、掘削後第 1 層が埋められるまでに幾らかの時間経過があったと考えられる。遺物は瓦器、青磁が出土した。

土坑 5・6（図 13、図版 7）

3 区西壁と南壁のほぼコーナー部分に位置し、主軸は北東方向に向く。調査区西壁に面し、土坑 4 に切られているため全形は明らかでないが、平面形状は隅丸長方形と隅丸正方形が連結したような形の逆 L 字型を呈す土坑である。隅丸長方形の検出長は 3.65m、幅は 1.4m である。隅丸正方形は長軸 0.65m、短軸 0.6m である。深度は北西部で 0.2m、北部で 0.3m、南部で 0.3m を測る。検出高は北西側の上端で T.P.+7.09m、南西側の上端で T.P.+7.02m、南東側の上端で T.P.+7.13m である。最深部は隅丸長方形の中央部で T.P.+6.78m である。断面形状は擂鉢状にやや傾斜をもち、北西側の下端で T.P.+6.82m、北側の下端で T.P.+6.86m、南側の下端で T.P.+6.84m である。

埋土は全体で 3 層である。第 1 層は暗灰黄色砂質土（2.5Y5/2：全体的に酸化、0.1～0.3cm 程の小礫が全体に混入、部分的に炭化物混入、全体的に黄褐・灰白色粘土ブロック混入、粘性なし、しまり悪い）である。全面に水平に堆積する。層厚は北西部で 0.15m、北部で 0.15m、南部で 0.05m を測る。第 2 層は暗灰黄色砂質土（2.5Y5/2：全体的に酸化、0.1～0.3cm 程の小礫が全体に混入、部分的に炭化物混入、層全体に黒褐・黄褐色粘土ブロック混入、粘性なし、しまり悪い）である。全面にはほぼ水平に堆積し、層厚は北西部で 0.1m、北部で 0.1m、南部で 0.05m を測る。第 3 層は灰色粘土と白色微砂の互層である。北西部にのみ堆積し、層厚は 0.01～0.02m を測る。

第 3 層は雨水などによる自然堆積であると考えられる。第 2、1 層は粘土ブロックが含まれることから、人為的に埋めたと考えられる。第 2 層と第 1 層が同質であること、第 2 層がほぼ水平に堆積していることから 2 層を埋め戻した後転圧し、また同じ土を埋めたと考えられる。遺物は綠釉陶器 1 片、瓦器 2 片、土師器 8 片が出土した。

土坑7(図13)

3区西半の南西部に位置し、主軸は北西方向に向く。調査区南壁に面しているため全形は明らかでないが、平面形状は隅丸長方形の西側短辺の一部が微妙に張り出した形を呈す土坑である。検出長は3.0m、幅は1.65mである。検出高は北側の上端でT.P.+7.14m、南側の上端でT.P.+7.11mである。断面形状は逆台形の下に小さな浅い皿がついたような形状である。最深部は底部の中央でT.P.+6.86mである。深度は北部で0.2m、中央部で0.3m、南部で0.2mである。

埋土は全体で3層である。第1層は暗灰黄色土(25Y5/2:全体的に酸化、全体的に0.1~1cm程の小礫混入、部分的に少量黄褐色粘土ブロック、炭化物混入、粘性なし、しまり悪い)である。埋土の大部分を占め、層厚は0.06~0.3mである。北部から中央部にかけての層厚が0.2~0.3m、中央部から南部にかけては0.3~0.06mの堆積である。第2層は灰色粘土と白色微砂の互層である。底部の中央には堆積せず、底部の北側と南側に堆積する。底部の北側で層厚0.02m、底部の南側で0.02~0.06mである。第3層は灰色土(5Y4/1:全体的に0.1~0.2cm程の小礫、炭化物、黄褐色の粘土ブロックが少量混入、粘性やや有、しまり良)である。南部にのみ堆積する。層厚は0.02~0.06mである。

第3層は粘土ブロックが含まれることから人為的に埋められた可能性もあるが、量的には少なく遺構を埋め戻すという意図が見えにくいので、山積みにされたブロックが自然に流れ込んだと考えられる。第2層は雨水などによる自然堆積と考えられる。本来、この層は底部の中央にも堆積していたと考えるほうが自然である。したがって、底部中央に堆積が認められないことは、第1層が埋められる時になくなつたと考えられる。第1層は粘土ブロックが含まれる事から人為的に埋められたと考えられる。第2層が自然堆積と考えられる事から、掘削後第1層が埋められるまでに幾らかの時間経過があったと考えられる。遺物は土師器2片が出土した。

土坑8・9・18・27(図13、図版7)

3区西半の中央部よりやや南西に位置する。主軸は北西方向に向き、平面では4つの遺構のように見えるが串団子状に連結している土坑である。これら4つの平面での切り合いは確認できなかつた。西から土坑8、9、18、27と付す。

埋土は全体で2層である。第1層は暗灰黄色砂質土(25Y5/2:全体的に酸化、全体的に0.1~1cm程の小礫混入、粘性やや有、しまり悪い)である。第2層は暗灰黄色砂質土(25Y5/2:全体的に酸化、層全体に黒褐・黄褐色粘土ブロックが多く入る、マンガン沈着、全体的に0.1~3cm程の小礫混入、粘性やや有、しまり悪い)である。

底部にそれぞれの遺構の境を示す肩が残つておらず、それぞれに下端が確認できるので4遺構はすべて独立して掘削された。土坑8の断面形状は、西側の上端から下端へ垂直気味に切り込み、底部の西側から東側にかけて浅い皿状を呈す。底部の東側から土坑9との境を示す肩へかけて緩やかに上がる。検出高は西側の上端でT.P.+7.10m、最深部は底部の中央でT.P.+6.70mを示す。

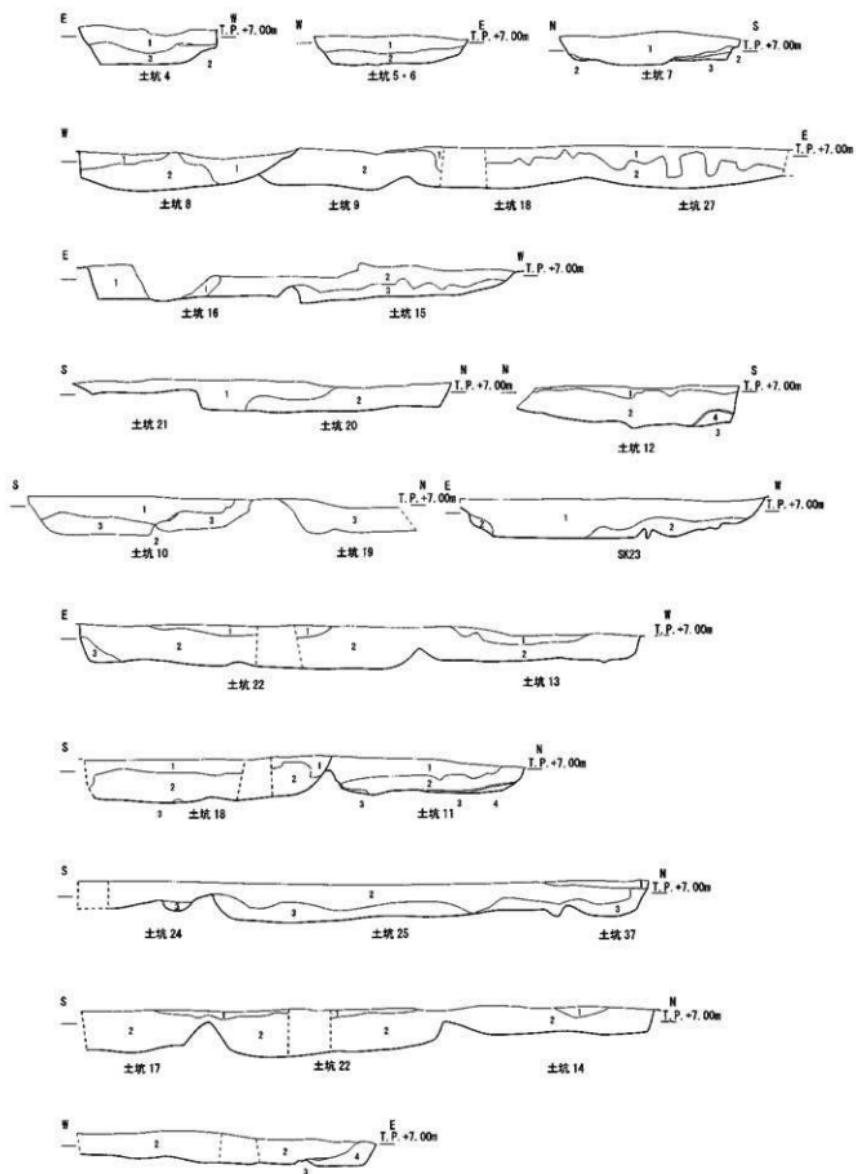


图 13 3 区土坑土层断面图 (S=1/60)

隅丸長方形を呈し、長軸 2.60m、短軸 1.60m である。土坑 9 の断面形状は、土坑 8 との境を示す肩から西側の下端へかけて緩やかに下がり、底部の西側から東側にかけてはほぼ平坦である。底部の東側から土坑 18 との境を示す肩へ緩やかに上がる。北側の上端で検出高 T.P.+7.04m、南側の上端で T.P.+7.10m である。最深部は底部の中央で T.P.+6.79m を示す。隅丸長方形で、南辺の一部が小さく三角に張り出したような形状を呈す。長軸 2.55m、短軸 1.50m を測る。この張り出した部分に関しては、他造構の隅丸長方形や椿円形のものと異なるので掘り間違えた可能性がある。土坑 18 の断面形状は、土坑 9 との境を示す肩から西側の下端へかけて緩やかに下がり、底部の西側から土坑 27 との境を示す肩へ緩やかに上がる。土坑 18 は北側の上端で検出高 T.P.+7.10m、最深部は底部の中央で T.P.+6.71m を示す。土坑 18 は調査区南壁に接しているため全形は明らかでないが、隅丸長方形を呈し、検出長 2.20m、幅 1.70m を測る。土坑 27 の断面形状は、土坑 18 との境を示す肩から中央部へかけて緩やかに下がり、底部の東側へ緩やかに上がる。土坑 27 は北側の上端で検出高 T.P.+7.14m、最深部は底部の中央で T.P.+6.70m を示す。土坑 27 も調査区南壁に接しているため全形は明らかでないが、不整形な台形を呈し、本来は隅丸長方形もしくは椿円形と思われる。検出長 1.15m、幅 0.70m の大きさである。

第 1 層は土坑 8 西側の上端から中央部へかけて堆積し、層厚は 0.2 ~ 0.05m を測る。0.1m 程堆積が途切れ、土坑 8 中央部から土坑 9 西部へかけて、土坑 8 と土坑 9 の境を示す肩の上を不整形な三角形状に堆積する。層厚は 0.05 ~ 0.3m を測る。土坑 9 東部から土坑 27 にかけては凹凸があり、層厚は 0.05 ~ 0.3m を測る。第 2 層は土坑 8 の西部から土坑 8 の中央部へかけて層厚 0.05 ~ 0.35m を測る。土坑 9 では埋土の大部分を占め、層厚 0.25 ~ 0.35m を測る。土坑 18 から土坑 27 にかけては凹凸があり、層厚は 0.05 ~ 0.35m を測る。

第 2 層は粘土ブロックが含まれることから人為的に埋められたと考えられる。土坑 9, 18, 27 では遺構の境を示す肩よりも高いレベルで途切れることなく連続的に堆積しているので、3 つが同時に埋め戻されたと考えられる。土坑 8 と土坑 9 の境で第 2 層の堆積が一旦途絶え、第 1 層が底部から検出面まで堆積している状況は、土坑 8 と土坑 9, 18, 27 が違う時に埋め戻されたと考えられる。土坑 8・9 の境を示す肩の第 1 層堆積状況は、土坑 8 が土坑 9 を切るように見えることから、土坑 9 が埋められたあと土坑 8 を掘削したと考えられる。土坑 8 第 2 層の堆積状況から土坑 8 は西部から埋め戻されたと考えられ、東部から掘削されたと考えられる。もしそうであれば、土坑 8 に堆積する第 1, 2 層は土坑 9, 18, 27 に堆積するものとは異なり、酷似している別の土と考えられる。

遺構の底部に残る肩から、土坑は連続的に掘られたものと考えられ、土坑 9 と土坑 18, 27 の第 2 層堆積量の差は、掘削後土坑 9 から埋め戻されたと考えられる。土坑 9 から埋められたとすると、土坑 27 から掘削が行われたと考えられる。第 2 層の上面の凹凸は埋め戻す際の踏み込みと考えられる。

土坑 15・16 (図 13)

3 区西半の中央部やや北西側に位置し、主軸は北西方向に向く。平面では、二つの遺構のように見える串田子状に連結している土坑である。これらの平面での切りあいは確認できなかった。西から土坑 15、16 と付す。

埋土は全体で 3 層である。第 1 層は暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2: 全体的に酸化、全体的に 0.1 ~ 1cm 程の小礫混入、粘性なし、しまり悪い) である。第 2 層はにぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3: 全体的に酸化、黒褐・黄褐色ブロック全体的に混入、全体的に 0.1 ~ 0.3cm 程の小礫混入、粘性なし、しまり良) である。第 3 層は暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2: 全体的に酸化、全体的に 0.1 ~ 0.3cm 程の小礫混入、黒褐・黄褐色粘土ブロックが全体的に混入、粘性やや有、しまり良) である。

底部に両土坑の境を示す肩が残っており、それぞれに下端が確認できるので 2 遺構は独立して掘削された。土坑 15 は西側の上端で検出高 T.P.+7.05m を測る。平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸 3.05m、短軸 2.25m の大きさである。断面形状は西側の上端から下端にかけてやや傾斜をもち、底部の西側から東側にかけて緩やかに下がる。そこから、土坑 16 との境を示す肩へ急な傾斜で上がる。最深部は底部の東側で T.P.+6.76m を測る。土坑 16 は東側の上端で検出高 T.P.+7.12m を測る。平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸 3.65m、短軸 1.9m を測る。断面形状は逆台形状を呈し、最深部は底部の中央で T.P.+6.76m を測る。

第 1 層は土坑 16 の中央部から東部にかけて堆積し、層厚は 0.2 ~ 0.3m を測る。第 2 層は土坑 15 から土坑 16 の中央部にかけて堆積し、層厚は 0.1 ~ 0.2m を測る。第 3 層は土坑 15 の全面に凹凸を示しながら堆積し、層厚は 0.05 ~ 0.2m を測る。

第 3、2 層は粘土ブロックが含まれることから人為的に埋められたと考えられる。第 3 層上面の凹凸は埋め戻す際の踏み込みと考えられる。第 2 層の堆積が土坑 15 の西側上端から 2 遺構の境を示す肩を覆う堆積は、土坑 15 から連続的に埋められたと考えられる。土坑 15 から埋められたとなると、土坑 16 から連続的に掘削されたと考えられる。遺物は土坑 15 から土師器 2 片、須恵質土器 1 片が出土した。

土坑 20・21 (図 13)

3 区西半の中央部に位置し、主軸は北西方向に向く。平面では二つの遺構のように見えるが、大きい隅丸長方形と小さい隅丸長方形が南北に連結したような土坑である。平面での切りあいは確認できなかった。北側を土坑 20、南側を土坑 21 と付す。

埋土は 2 層である。第 1 層は暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2: 全体的にやや酸化、層全体に黒褐・黄褐色粘土ブロックが少し入る、全体的に 0.1 ~ 3cm 程の小礫混入、粘性なし、しまり良) である。第 2 層は暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2: 全体的にやや酸化、黒褐・黄褐色粘土ブロックの割合が第 1 層よりも多く、2.3cm ~ 7.8cm である、全体的に 0.1 ~ 1cm 程の小礫混入、粘性やや有、しまり良) である。

両土坑に下端が確認できるので2造構は独立して掘削された。土坑20北側上端の検出高はT.P.+7.09mである。平面形状は、西半部が方形、東半部がやや半円形をしたような形で、長軸4m、短軸2.4mを測る。断面形状は、逆台形状を呈し最深部は底部の中央でT.P.+6.81mである。土坑21の南側上端の検出高はT.P.+7.1mである。平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸2.1m、短軸1.15mを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、最深部は底部の南側でT.P.+7.0mである。

第1層は土坑20中央部から土坑21にかけて堆積し、層厚は0.1～0.3mを測る。第2層は土坑20の北部から南部にかけて堆積し、層厚は0.15～0.25mを測る。

第2、1層は粘土ブロックが含まれることから人為的に埋められたと考えられる。遺物は出土しなかった。

土坑12（図13）

3区西半の中央部やや西側に位置し、主軸は北西方向に向く。平面形状は隅丸長方形を呈す土坑である。長軸3.20m、短軸2.15mの大きさである。検出高は北肩部でT.P.+7.04m、南肩部でT.P.+7.06mである。最深部は中央部でT.P.+6.64mである。断面形状はやや垂直気味に落ち、底部の北側から中央にかけて緩やかに低くなり、底部の中央から南側にかけてはほぼ平坦である。深度は北部で0.25m、中央部で0.4m、南部で0.4mである。

埋土は全体で4層である。第1層は暗灰黄色砂質土（25Y5/2:0.1～1cm程の小礫全体に混入、粘性なし、しまり悪い）である。全面に堆積し、若干の凹凸が認められる。層厚は北部で0.04m、中央部で0.1m、南部で0.06mである。第2層は暗灰黄色砂質土（25Y5/2:全体的に酸化、0.1～1cm程の小礫全体に混入、層全体に黒褐・黄褐色粘土ブロック多く混入、粘性やや有、しまり良い）である。埋土の大部分を占め、全面に堆積する。層厚は北部で0.2m、中央部で0.35m、南部で0.3mである。第3層は灰色粘土と白色微砂の互層である。南部にのみ堆積し、層厚は0.02mである。第4層は暗灰黄色砂質土（25Y5/2:黒褐色・黄褐色粘土ブロック多く混入、粘性やや有、しまり良）である。南部にのみ堆積し、層厚は0.1mである。

第4層は粘土ブロックが含まれることから人為的に埋められた可能性もあるが、量的には少なく遺構を埋め戻すという意図が見えにくいので、山積みにされたブロックが自然に流れ込んだと考えられる。第3層は雨水などによる自然堆積と考えられる。第2層は粘土ブロックが含まれることから人為的に埋められたと考えられる。第3層が自然堆積と考えられることから掘削後第2層が埋められるまでに幾らかの時間経過があったと考えられる。遺物は緑釉陶器1片、土師器1片、須恵器1片が出土した。

土坑10・19（図13）

3区西半の中央部よりやや西側に位置し、主軸は北西方向に向く。平面形状はともに隅丸長方形を呈す土坑である。土坑10は長軸2.80m、短軸2.0mを測る。検出高は西側上端でT.P.+7.1m、

東側上端で T.P.+7.05m、最深部は底部中央で T.P.+6.7m である。土坑 10 の断面形状は南側の上端から下端にかけて鉢状にやや傾斜を持ち、底部の南側から中央部にかけては平坦である。底部の中央からやや垂直気味に 0.1m 程たち上がり、底部の北側へかけて浅い皿状を呈し、やや傾斜をもって北側の上端へ上がる。土坑 19 は長軸 3.4m、短軸 1.4m を測る。検出高は西側の上端で T.P.+7.05m、東側の上端で T.P.+7.05m、最深部は T.P.+6.71m である。土坑 19 の断面形状は逆台形状を呈す。

埋土は全体で 3 層である。第 1 層は暗灰黄色砂質土（25Y4/2：全体的にやや酸化、全体的に 0.1 ~ 0.2cm 程度の小礫混入、黒褐・黄褐色ブロック土全体的に少量混入、粘性なし、しまり良）である。土坑 10 のほぼ全面に堆積する。層厚は南部で 0.25m、中央部で 0.3m、北部で 0.15m を測る。第 2 層は灰色粘土と白色微砂の互層である。土坑 10 中央部にのみ堆積し、層厚は 0.02m を測る。第 3 層は暗灰黄色砂質土（25Y4/2：全体的に酸化、4.5cm ~ 20cm 大の黒褐・黄褐色ブロック土全体的に多く混入、25Y5/1：黄灰色土が全体的に多く混入、粘性やや有、しまり良）である。土坑 10、19 の全面に堆積する。層厚は土坑 10 の南部で 0.2m、中央部で 0.1m、北部で 0.15m を測る。土坑 19 の南部で 0.35m、中央部で 0.25m、北部で 0.35m を測る。

第 3 層は粘土ブロックが含まれることから人為的に埋められたと考えられる。土坑 19 と土坑 10 は連続的に埋められたと考えられ、掘削後北側の土坑 19 から埋め戻されたと考えられる。第 2 層は雨水などによる自然堆積であると考えられる。第 1 層は粘土ブロックが含まれることから人為的な堆積であると考えられる。第 2 層が自然堆積と考えられることから、掘削後第 1 層が埋められるまでに幾らかの時間経過があったと考えられる。したがって、同時に 2 遺構が埋め戻され、土坑 10 は完全に埋め戻されずに放置された期間が存在したと考えられる。遺物は出土しなかった。

土坑 13・22・23 (図 13)

3 区西半中央部よりやや南西側に位置する。平面では 2 つの遺構のように見え、串団子状に連結している土坑である。主軸は北西方向に向き、西から土坑 13、22 と付す。土坑 13 と土坑 22 の平面での切りあいは確認できなかった。土坑 23 は土坑 22 の東に位置する土坑で、主軸は北西方向に向く。調査区南壁に面しているため全形は明らかでないが、他遺構から隅丸長方形、もしくは楕円形と考えられる。検出長は 1.9m、幅 1.75m の大きさである。検出高は西側の上端で T.P.+7.16m である。断面形状はすり鉢状にやや傾斜をもち、底部の西側から中央部にかけてやや凹凸を示し、底部の中央から東側にかけては平坦である。

土坑 23 の埋土は全体で 2 層である。第 1 層は暗灰黄色砂質土（25Y4/2：全体的に酸化、黒褐・黄褐色粘土ブロック多く混入、全体的に 0.1 ~ 1cm 程度の小礫混入、粘性やや有、しまり良）である。全面に堆積し、層厚は東部で 0.4m、西部で 0.15m を測る。第 2 層は暗灰黄色砂質土（25Y4/2：全体的に酸化、黒褐・黄褐色粘土ブロック少量混入、全体的に 0.1 ~ 1cm 程度の小礫混入、粘性やや有、

しまり良)である。西半部、東部に堆積し、層厚は0.1mを測る。

土坑13、22の埋土は全体で3層である。第1層は暗灰黄色砂質土(25Y4/2:全体的に酸化、全体的に0.1~0.2cm程の小礫混入、粘性やや有、しまり悪い)である。第2層は暗灰黄色砂質土(25Y4/2:全体的に酸化、層全体に黒褐・黄褐色粘土ブロック少量混入、粘性やや有、しまり良)である。第3層は暗灰黄色砂質土(25Y4/2:全体的に酸化、第2層よりも黒褐・黄褐色粘土ブロックが全体的に多く混入、全体的に0.1~1cm程の小礫混入、粘性やや有、しまり良)である。

土坑13、22の底部には両土坑の境を示す肩が少し残っており、それぞれに下端が確認できるので2遺構は独立して掘削された。検出高は土坑13の西側上端でT.P.+6.99m、土坑22の東側上端でT.P.+7.15mである。土坑13の平面形状は隅丸正方形を呈し、長軸2.2m、短軸2.1mを測る。土坑22の平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸3.3m、短軸2.2mを測る。土坑13の西端断面では西側の上端から下端にかけてすり鉢状にやや傾斜をもち、底部の西側から東側にかけてはほぼ平坦で、底部の東側から土坑22との境を示す肩へ緩やかにあがる。最深部は底部中央でT.P.+6.74mである。土坑22の断面形状は、土坑13との肩から底部の西側にかけて緩やかな傾斜をもち、底部の西側から東側にかけてはほぼ平坦である。東側の下端から上端にかけては垂直気味に上がる。最深部は底部の西側でT.P.+6.7mである。

土坑13、22の第1層は土坑13、22の各中央部に堆積する。土坑13では層厚0.08m、土坑22で層厚0.1mを測る。第2層は土坑13、土坑22全面に堆積し、土坑13西部で層厚0.2m、中央部で0.15m、東部で0.2m、土坑22中央部で0.25m、東部で0.35mを測る。第3層は土坑22東部に堆積し、層厚は0.05~0.2mである。

土坑13、22の第3、2層は粘土ブロックが含まれることから人為的に埋められたと考えられる。しかし、第3層は量的には少なく遺構を埋め戻すという意図が見えにくいで山積みにされたブロックが自然に流れ込んだと考えられる。第2層が土坑13、22の境を示す肩よりも高いレベルで途切れることなく全面に堆積していることは、2遺構が連続的に埋められたと考えられる。土坑23の第2、1層は粘土ブロックが含まれることから人為的に埋められたと考えられる。第2層が西部に堆積していることから、西側から埋め戻されたと考えられる。遺物は土坑22から土師器10片、須恵器2片、瓦器1片、瓦3片、すり鉢1片、土坑23から土師器1片、黒色土器1片が出土した。

土坑11・18(図13、図版8)

3区西半中央部の南西側に位置し、北側が土坑11、南側が土坑18である。土坑18は土坑11を切り、両遺構の主軸は北西方向に向いている。前述したように土坑18は調査区南壁に面しているため全形は明らかでないが、隅丸長方形を呈し、検出長2.2m、幅1.7mを測る。土坑11は長軸3.8m、短軸1.9mを測る。土坑18は南側の上端で検出高T.P.+7.1m、土坑18、11が切りあ

う地点で T.P.+7.15m、土坑 11 は北側の上端で T.P.+7.02m である。

土坑 18、11 の断面形状は逆台形状を呈し、底はほぼ平坦である。土坑 18 の最深部は底部の中央で T.P.+6.68m、土坑 11 の最深部は底部の南側で T.P.+6.76m である。

土坑 18 の埋土は全体で 3 層である。第 1 層は暗灰黄色砂質土（2.5Y4/2：全体的に酸化、全体的に 0.1 ~ 1cm 程の小礫混入、層全体に黒褐・黄褐色粘土ブロック少々混入、粘性やや有、しまり良）である。土坑 18 全面に堆積し、層厚は北部で 0.2m、中央部で 0.1m、南部で 0.25m を測る。第 2 層は暗灰黄色砂質土（2.5Y4/2：全体的に酸化、全体的に 0.1 ~ 1cm 程の小礫混入、黒褐・黄褐色粘土ブロック多く混入、粘性やや有、しまり良）である。土坑 18 の全面に堆積し、北部から南部にかけて層厚は 0.3m を測る。第 3 層は灰色粗砂である。土坑 18 中央部にのみ堆積し、層厚は 0.02m を測る。

土坑 11 の埋土は全体で 4 層である。第 1 層は暗灰黄色砂質土（2.5Y4/2：全体的に酸化、全体的に 0.1 ~ 1cm 程の小礫混入、層全体に黒褐・黄褐色粘土ブロック少々混入、粘性やや有、しまり良）である。最北部にはないが、土坑 11 のほぼ全面に堆積する。北側から南側にかけて下がる堆積である。層厚は北部で 0.1m、中央部で 0.15m、南部で 0.25m を測る。第 2 層は暗灰黄色砂質土（2.5Y4/2：全体的に酸化、全体的に 0.1 ~ 1cm 程の小礫混入、黒褐・黄褐色粘土ブロック多く混入、粘性やや有、しまり良）である。土坑 11 全面に堆積し、北側から南側にかけて下がる堆積である。層厚は北部から南部にかけて 0.15m を測る。第 3 層は灰色粘土と白色微砂の互層である。南部と北半部に堆積し、層厚は 0.02m を測る。第 4 層は暗灰黄色砂質土（2.5Y4/2：全体的に酸化、全体的に 0.1 ~ 3cm 程の小礫混入、黒褐・黄褐色粘土ブロック多く混入、粘性やや有、しまり良）である。土坑 11 の底部の北側に堆積し、層厚は 0.04m を測る。

土坑 11 の第 4 層はブロック土が含まれることから人為的に埋められた可能性もあるが、量的には少なく遺構を埋め戻すという意図が見えにくいので山積みにされたブロックが自然に流れ込んだと考えられる。第 3 層は雨水などによる自然堆積と考えられる。第 2、1 層はブロック土が含まれることから人為的に埋められたと考えられる。第 2 層の堆積から土坑 11 は北部から埋められたと考えられる。

土坑 18 の第 3 層は雨水などによる自然堆積と考えられる。第 2、1 層はブロック土が含まれることから人為的に埋められたと考えられる。土坑 11 が完全に埋められたあと土坑 18 は掘削された。両遺構の第 3 層が自然堆積であると考えられることは、掘削後埋められるまでにそれぞれいくらかの時間経過があったと考えられる。遺物は土坑 11 から緑釉陶器 1 片、土坑 18 から青磁 1 片、土師器 1 片が出土した。

土坑 37・25・24 (図 13)

3 区西半中央部の南東側に位置する。主軸は北西方向に向き、平面では 2 つの遺構が連結したような土坑である。北から土坑 37・25・24 と付す。

埋土は全体で3層である。第1層は暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2:全体的に0.2~5cm程の小礫多く混入、全体的にマンガン沈着、粘性やや有、しまり良)である。第2層は暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2:全体的にやや酸化、全体的に0.1~0.3cm程の小礫混入、全体的にマンガン沈着、全体的に黒褐・黄褐色粘土ブロック少量混入、粘性やや有、しまり良)である。第3層は暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2:全体的にやや酸化、全体的に0.1~0.3cm程の小礫混入、全体的にマンガン沈着、全体的に黒褐・黄褐色粘土ブロック多く混入、粘性やや有、しまり良)である。

底部にそれぞれの土坑の境を示す肩が少し残っており、それぞれに下端が確認できるので3遺構は独立して掘削された。土坑37の断面形状は、北端部で地山面からやや垂直気味に落ちる掘り方が見られる。底部は浅い皿状を呈し、土坑25との境を示す肩へ緩やかに上がる。最深部は底部の中央でT.P.+6.76mを測る。土坑25の断面形状は、土坑37との境を示す肩から土坑25の北側の下端にかけて緩やかに下がり、底部の北側から南側にかけてはほぼ平坦で、土坑24との境を示す肩へやや傾斜をもって上がる。最深部は底部の南側でT.P.+6.74mを測る。土坑24の断面形状は、土坑25との境を示す肩から緩やかな傾斜をもって下がり、南壁に続いていく。最深部は南壁際でT.P.+6.88mを測る。土坑37は北側の上端で検出高T.P.+7.18m、土坑25は西側の上端でT.P.+7.12m、土坑24は南壁の上端でT.P.+7.12mである。土坑37の平面形状は長楕円形を呈し、長軸5.50m、短軸0.6~0.9mを測る。土坑25の平面形状は隅丸長方形を呈す。検出長7.20m、幅3.6~3.85mを測る。土坑24の平面形状は調査区南壁に面しているため全形は明らかでないが、隅丸長方形を呈す。検出長5.2m、幅2mを測る。

第1層は、土坑37から土坑25の北部にかけて堆積し、層厚0.04~0.08mを測る。第2層は、土坑37最北部を除き、土坑37から土坑24にかけて全面に堆積する。土坑37では層厚0.15m、土坑25では北部から南部にかけて層厚0.3~0.1m、土坑24では北部から南部にかけて層厚0.1~0.2mを測る。第3層は、土坑37から土坑25にかけて凹凸を示しながら全面に堆積し、層厚は0.02~0.2mを測る。土坑24北部にも部分的に堆積し、層厚は0.08mを測る。

第3、2層は粘土ブロックが含まれることから人為的に埋められたと考えられる。土坑37と土坑25の境を示す肩が第3層に覆われて埋められているということ、土坑25と土坑24の境を示す肩が第2層で覆われて埋められているということは、土坑37、25から連続的に埋められたと考えられる。土坑の底部に残る肩から、これらは連続的に掘られたものと考えられる。遺物は土坑25から土師器8片、須恵器1片、羽釜1片が出土した。

土坑17・22・14(図13、図版9)

3区西半の中南部に位置する。主軸は北西方向に向き、平面では3つの遺構のように見えるが、串団子状に連結している土坑である。これら3つの平面での切りあいは確認できなかった。南から土坑17・22・14と付す。

埋土は全体で4層である。第1層は暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2:全体的に酸化、全体的に0.1

～0.2cm程の小礫混入、粘性やや有、しまり悪い）である。第2層は暗灰黄色砂質土（25Y4/2：全体的に酸化、全体的に0.1～0.2cm程の小礫混入、層全体に黒褐・黄褐色粘土ブロック少量混入、粘性やや有、しまり良）である。第3層は灰色粘土と白色微砂の互層である。第4層は灰黄褐色砂質土（10YR4/2：黒褐・黄褐色粘土ブロック多く混入、粘性やや有、しまり良、全体的に0.1～0.3cm程の小礫混入）である。

底部にそれぞれの土坑の境を示す肩が少し残っており、それぞれに下端が確認できるので3遺構はすべて独立して掘削された。土坑17の断面形状は、底はほぼ平坦で、土坑22との境を示す肩へ傾斜をもって上がる。土坑22の断面形状は、土坑17との境を示す肩から南側の下端にかけて傾斜をもって下がる。底部は南側から北側へかけて緩やかに上がり、北側の下端から土坑14との境を示す肩にかけて傾斜をもって上がる。土坑14の断面形状は、土坑22との境を示す肩から南側の下端へかけて緩やかな傾斜をもち、底部の南側から北側へかけてはほぼ平坦である。北側の下端から上端へかけてはやや垂直気味に立ち上がる。土坑17は北側の上端で検出高T.P.+7.15m、最深部は底部の中央でT.P.+6.71mである。調査区南壁に面しているため全形は明らかでないが、隅丸長方形を呈し、検出長2.7m、幅1.75mの大きさである。土坑22は東側の上端で検出高T.P.+7.15m、最深部は底部の南側でT.P.+6.66mである。平面形状は隅丸長方形を呈し、長軸3.3m、短軸2.2mの大きさである。土坑14は北側の上端で検出高T.P.+7.1m、最深部は底部の中央でT.P.+6.66mである。平面形状は不整形な隅丸長方形を呈し、長軸6.2m、短軸2～2.15mの大きさである。

第1層は土坑17の北部から土坑22の北部にかけて堆積し、層厚は0.02～0.06mを測る。土坑14の中央部にも堆積し、層厚は0.1mを測る。第2層は土坑17から土坑14にかけて全面に堆積し、土坑17の南部では層厚0.4m、土坑22の中央部では0.4m、土坑14の中央部では0.2m、土坑14の北部では0.2mを測る。第3層は土坑14の西部にのみ堆積し、層厚は0.02mを測る。第4層は土坑14の西部にのみ堆積し、層厚は0.08～0.25mを測る。

第4層は粘土ブロックが含まれることから人為的に埋められたと考えられる。土坑14の西部に堆積していることは、埋め戻しが西側から行われたものと考えられる。第3層は雨水などによる自然堆積である。自然堆積と考えられることから、土坑14を掘削後第2層が埋められるまでにいくらかの時間経過があったと考えられる。第2層は粘土ブロックが含まれることから人為的に埋められたと考えられる。それぞれの土坑の境を示す肩から、これらは連続的に掘られたものであると考えられ、その肩を覆う第2層の堆積は3遺構が連続的に埋められたと考えられる。遺物は土坑17から土師器1片、瓦器1片。土坑22から瓦1片、瓦器1片、擂鉢1片、須恵器1片、土師器7片。土坑14から綠釉陶器1片、土師器1片、瓦器1片が出土した。

第5章 まとめ

今回の発掘調査の結果、安松田遺跡では溝、畦畔、井戸、土坑などを検出した。

1区からは溝1を検出した。遺物は出土しなかったので遺構の時期は不明である。

2区からは畦畔2、土坑3を検出した。畦畔2は遺物が出土しないこと、基本層序の第3層及び第4層の上に盛られていることが判明したが、築かれた時期を判断する根拠は得られなかった。しかし、第1層直下であることから府営住宅建設前まで使われていた田の畦畔であると考えられる。土坑3は第4層を切り込み、遺物は出土しなかったため遺構の時期は不明であるが、畦畔以前の土坑といえる。

3区からは井戸29、溝30、土坑4～28、31～37を検出した。井戸29は田の境付近にあることから畑作に伴う井戸と考えられる。出土遺物はなく水田造成の時期もわからぬため井戸使用開始期は不明であるが、府営住宅建設前まで使用されていた可能性は考えられる。溝30は第4層を切り込む溝状遺構であるが遺物は出土しなかったため、遺構の時期は不明である。溝30の埋土は基本層序の第3層であった。溝1、土坑3の埋土も同じ土なので同じ時期に埋没した遺構であると考えられる。

図14-Bの範囲で土坑を検出した。埋土に第3層黒褐色粘土ブロックが含まれることから第3層上面を切り込む土坑である。土坑に共通する幾つかの特徴を挙げる。①第4層を掘りこみ、掘削は必ず粘土の部分で止まっている。②遺構間はわずかな隙間をあけて密集しており、場合によつては連続的に掘られ、埋め戻されている。③平・断面の形状が似ており、主軸方向が決まっている。④基本的に埋土の状況は暗灰黄色砂質土に耕土、黒褐・黄褐色粘土ブロックが混在して入っている不規則な状況である。以上の点から、土坑28以外は同じような特徴をもち、これらの土坑は粘土採掘坑であると考えられる（以下、粘土坑と称す）。

粘土坑の平面形状は全体的に隅丸長方形で、掘り方は逆台形状、皿状を呈するものが多く、2m×1m～7m×4m、深度は0.1～0.5mと規模は様々であった。埋土に含まれる自然堆積層の状況から、1回あるいは数回に分けて埋め戻したと考えられる。

平・断面の切りあい関係でいくらか粘土坑の新旧関係を確認することができた。それに加えて、個々の遺構の部分で述べた粘土採取および埋め戻しの方向をまとめると掘削順序は図14の矢印通りである。粘土採取はまず図14-B東部の土坑33・35から始まり、連続的に土坑23・24・25・37が掘削された。土坑23・24・25・37が北西方向から埋め戻されていることは、埋め戻す時に土坑17・22・14・20・21がまだ掘削されていないと考えられる。続いて、土坑11が掘削されたと考えられる。土坑11は18に切られており、北東方向へ向かって粘土を搬出し、北東方向から埋められた。続いて土坑27・18・9が連続的に掘削されたと考えられる。その中の土坑18は11を切り、土坑27・18・9は北西方向へ向かって粘土を搬出し、北西方向から埋められた。続いて、土坑17・22・13・14、土坑8が掘削されたと考えられる。土坑17は27を、土坑8は9を切つ

ている。土坑 17・22・13・14 がどの順序で掘削されたかは不明であるが、土坑 14 が北西方
向から埋められていることは、埋められる段階で土坑 12・32 はまだ掘削されていないと考えら

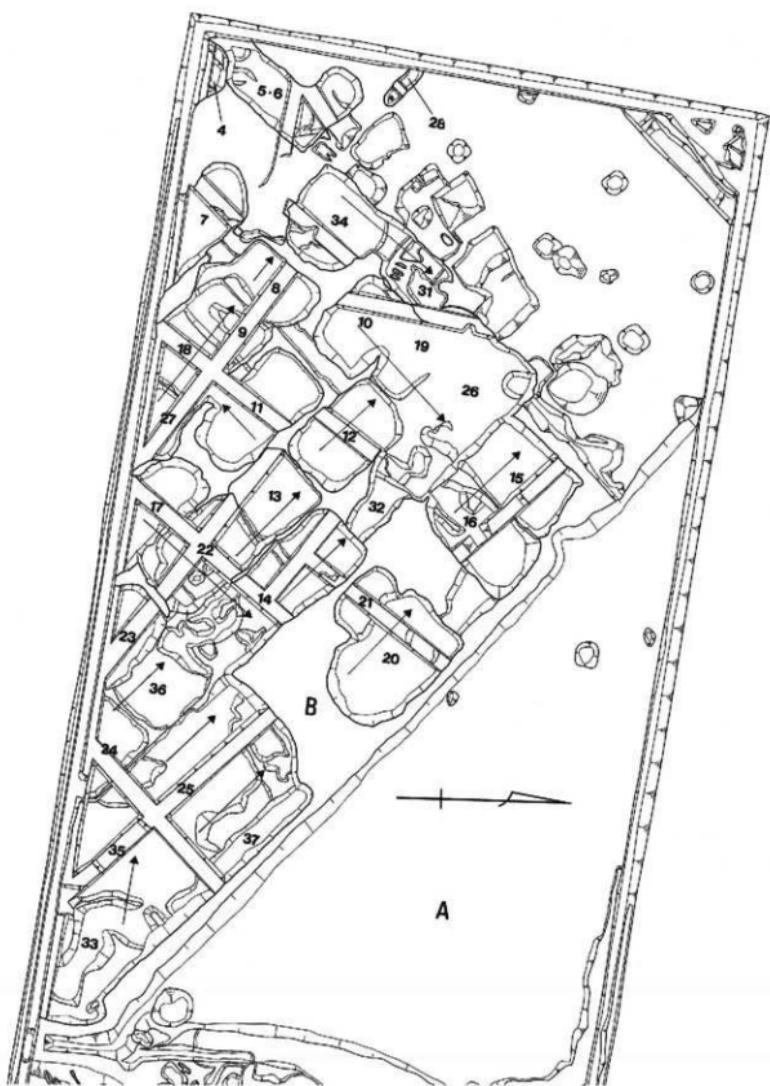


図 14 土坑掘削順序図

れる。続いて、土坑 34・31、土坑 10・19・12・26・32 が連続的に掘削されたと考えられる。土坑 10・19 は北東方向へ向かって粘土を搬出し、北東方向から埋められたと考えられる。続いて、土坑 20・21 が連続的に掘削されたと考えられる。土坑 20・21 は北西方向へ向かって掘削され、北西方向から埋められたと考えられる。続いて、土坑 16・15 が連続的に掘削されたと考えられる。土坑 16・15 は北西方向へ向かって掘削され、北西方向から埋められたと考えられる。

土坑 5・6、7 と隣り合う土坑 34・31、8・9・18・27 との新旧関係は不明であった。土坑 5・6 は 4 に切られているため 4 の方が新しいといえるが、掘削および埋め戻しの方向に関しては不明である。土坑 5・6、4、7 の新旧関係も不明である。

以上のことから、土坑 4～7 を除く粘土坑の粘土搬出は土坑 20・21・15・16 の方へ向かって行われたと考えられる。したがって、確認できた範囲では土坑 33 が最も古く、土坑 15 が最も新しいと考えられる。尚、この新旧関係はあくまでも個々の遺構の重なりや、掘削および埋め戻し方向から考えられたことである。粘土採取が複数人で行われたと考えるなら、当然作業の同時性が関係してくるので、全てがこの新旧関係の順に行われたものではないということを付け加えておく。

図 14-B 西北部では密にあった粘土坑がなくなり、土坑 5・6、7 と土坑 27・8・9・18 の間では田の段に平行した、ちょうど土坑 28 と同じ幅の直線的な隙間が見られる。埋土も土坑 4・5・6、7 では灰色土がベースであるのに対し、土坑 8、9、18 は黄・黒褐色粘土ブロックを多く含む暗灰黄色砂質土で、埋土の種類が異なる。この事からここは田地の境で、これを境に粘土採取の時期が違うのではないかと考えられる。したがって、粘土採取は基本的に田一枚単位で行われたと考えられる。そのように考えるなら土坑 27・31・19・26 の西端部が直線的にみえ、土坑 27・18・9・8 の粘土搬出が北東方向へのみ行われることは、ここが粘土採取の可能な範囲を示す田の境であると考えられる。加えて、粘土採取は田一枚の範囲でのみ行わなければならず、粘土及び埋め土の搬出入口が確保されねばならない。上記のとおり、粘土の搬出は土坑 20・21・15・16 の方へ向かって行われ、この場所は周囲と比較しても密に掘削されていない。このことから、この場所が搬出入口および通路のような役割を果たしていたと考えられる。

前述したように図 14-A の範囲はさらに田が 1 段低く、これは耕地化するために削平された場所である。粘土坑が図 14-B の範囲にしか存在しない、平面的に粘土坑の長軸方向が全て段のラインと平行するということは、耕地化された後粘土採取を行ったものと考えられる。

粘土坑から出土した遺物量は全体的に少なく、コンテナ 1 箱にも満たないほどであった。特に磨滅して丸みを帯びた破片が多く、埋土のベースである暗灰黄色砂質土に混入して何度も動かされた形跡が認められた。既往の調査では中世～近世の粘土坑が検出されている。本調査区内では出土した遺物から、粘土坑の掘削時期は近世以降といえるが、水田開始時期の根拠は見出せなかつたため、確定するまでには至らなかった。また、粘土の用途・利用法に関する根拠を見出すことはできなかった。今後、周辺地域の新たな発掘調査で明らかになることを期待したい。

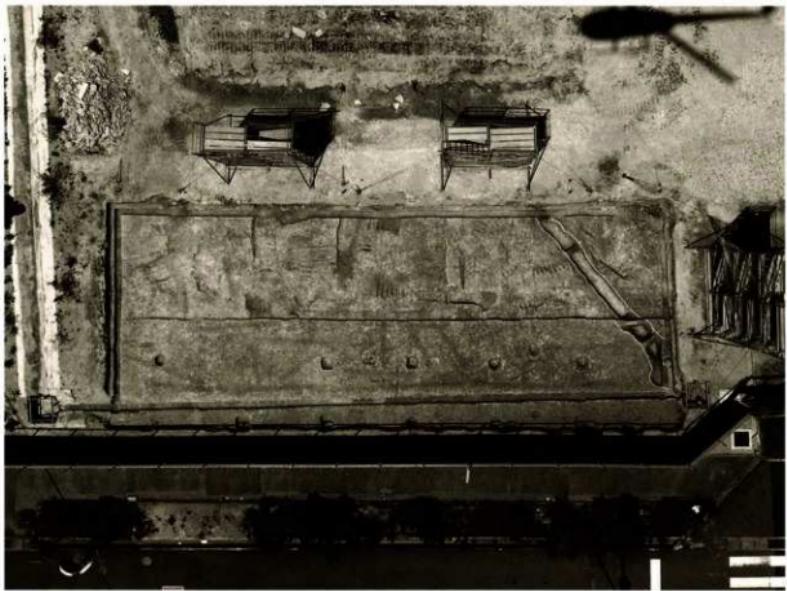
写 真 図 版



調査地遠景



調査地全景



1区全景



1区溝1検出状況



1区溝1土層断面



1区溝1完掘状況



2区全景



2区畦畔2検出状況



2区土坑3検出状況



3区全景



3区西半全景



3区東半全景



3区土坑5、6



3区土坑7、8、9



3区土坑33、35



3区土坑11、18自然堆積状況



3区土坑14自然堆積状況



3区土坑34・31



3区井戸29土層断面



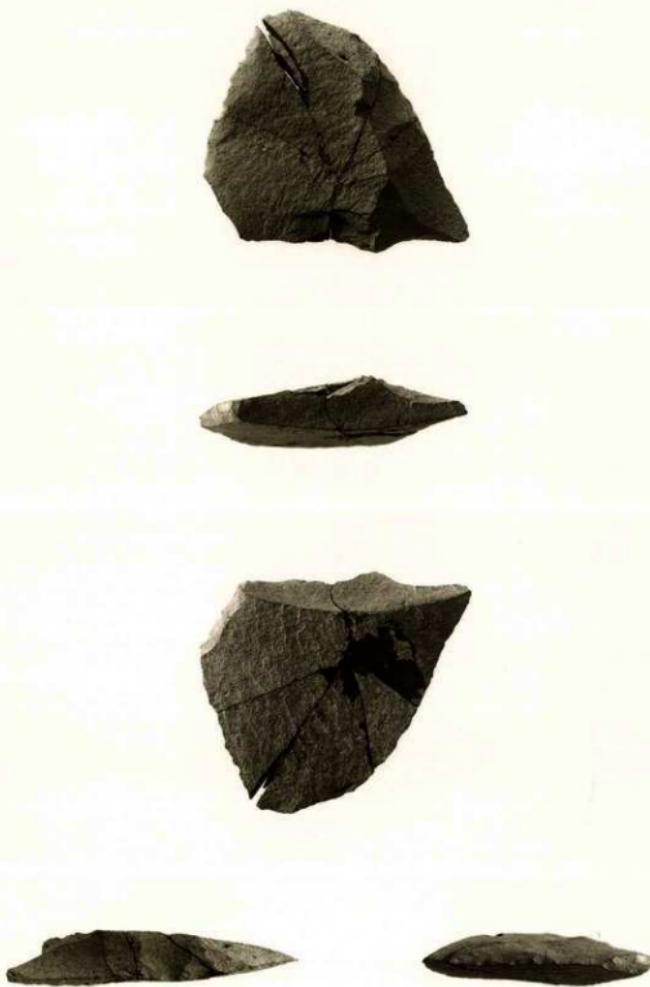
3区井戸29完掘状況



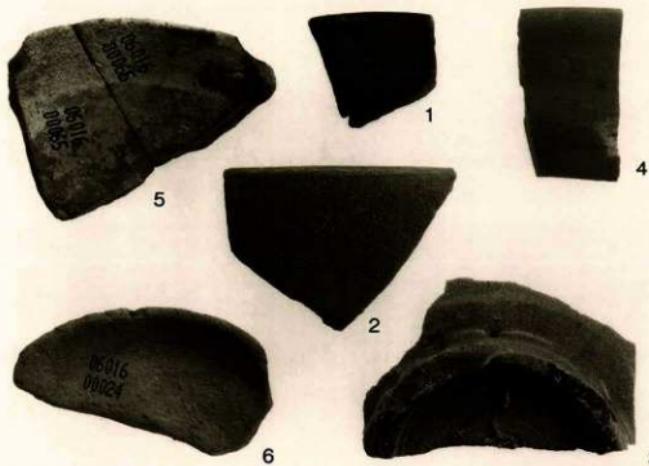
3区溝30検出状況



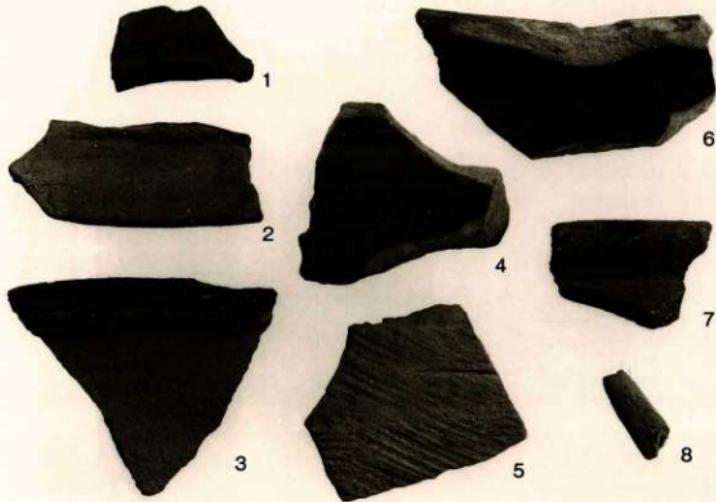
3区溝30完掘状況



3区西半黄褐色粘土出土サヌカイト製翼状剥片石核(実大)



3区土坑4(1·2)、土坑13(3)、包含層(4~6)出土土器



3区包含層(1~8)出土土器・土錐

報 告 書 抄 錄

大阪府埋蔵文化財調査報告 2007-8
安松田遺跡 II

発行 大阪府教育委員会
〒 540-8571
大阪市中央区大手前2丁目
Tel. 06-6941-0351 (代)

発行日 平成20年3月31日
印 刷 株式会社近畿印刷センター
〒 582-0001
柏原市本郷5丁目6番25号
Tel. 072-920-3488 (代)

